

入館無料。アマノの火を消すな

「世界 こんなところに日本人！」といったテレビ番組が各局で人気を博している。国際結婚で海外に行き、信じられないような苦勞をしたり、ボランティアで渡航したまま住みついたり、風変わりな日本人を取り上げる番組だ。「お涙ちょうだい」式で紹介すると視聴率が上がるから、テレビ局はますますおかしな人を探すことになる。

でも「本物の成功者」が話題になることは少ない。私なら真っ先にこの人を紹介する。世界には政治家や経営者の日本人（日系人）はそれなりにいるが、現地政府や国民から尊敬され、その国に多大な貢献をしている人はそう多くない。

1982年に亡くなったが、アンデス古代文明の発掘と研究に命をささげた天野芳太郎である。生きていない人じゃないとダメ、と言うなら、美代子夫人に登場してもらってもいい。天野はペルーではフジモリ元大統領以上に有名な日本人だ。なぜなら首都リマに「天野博物館（ムセオ・アマノ）」という考古学博物館を建てたからだ。

紀元前1000年ごろから16世紀のインカ帝国まで、天野が発掘したおびただしい金細工、織物、土器などが展示されている。ペルーの誇る文化遺産が個人の博物館に所蔵されているのは異例といえる。しかも天野は外国人だ。

そのユニークな博物館が2014年で開館50周年を迎える。1964年に自費で建設して以来ずっと入館無

料を続けてきた。生前天野は「自分は日本人。ペルーの歴史的遺産の展示でお金をもらうわけにはいかない」と公言していた。

2013年は日本・ペルー修好140周年にあたり、現館長の美代子夫人がペルーの議会表彰を受けた。夫人の関係者への感謝メッセージの中に「チャンカイ文化への評価が高まっているのがうれしい」というくだりがある。

アンデス文明には先史時代のプレインカから続く壮大な物語がある。モンゴロイド（モンゴル人種）がアジアから南米大陸に渡り、独自につくりあげた文明だ。アンデス文明は16世紀のインカ帝国で終わるが、それより前に「チャンカイ」という文化があった。

この文化に注目し、従来のアンデス研究に一石を投じたのが天野だった。天野はチャンカイ文化は日本人のわび・さびと同じ独特の感性をもち、「日本との結びつきがある」と主張していた。

現在のエラルド・エスカラ駐日ペルー大使も「チャンカイ土器に描かれた鳥と魚の絵柄が日本の長良川の鵜飼いとそっくりなのでびっくりした」と言う。

ひな人形の「5人ばやし」と同じような絵もあった。2012～13年にはスペイン、アメリカ、スイスなどで天野博物館の展覧会が開かれたという。

世界の古代文明はエジプト、メソポタミア、インダス、中国の4つとされているが、アンデスを加えた5大文明と書き換えるのが正

しい。金細工などの先進性はエジプト、メソポタミアに劣らない。

天野は1898（明治31）年に秋田に生まれ、30歳の時に横浜港からアフリカを経て南米へ渡った。それを機に中南米各国で商売を成功させ、大もうけをする。

その資金をもとに50代からアンデス考古学にのめり込む。読書家で物を書くのが好きだった天野は当時、ドイツ人ハインリッヒ・シュリーマンの『古代への情熱 シュリーマン自伝』を読み、いつかは考古学をやろうと考えていたようだ。シュリーマンは19世紀末に実業家として莫大な資金を貯め、中高年になって「トロイの遺跡」を発見した男だ。

天野はインカ、プレインカの発掘を始めたころ、東京大学の泉靖一博士と偶然知り合い、情報を交換している。1958年から始まった東大のアンデス研究は天野の協力がなければ成り立たなかったかもしれない。

少し前の東大のリーダー、大貫良夫名誉教授は「天野博物館友の会」の会長である。友の会は2013年6月に博物館に4800ドルを寄付した。その寄付や日本大使館からの支援金で、1～3階を結ぶエレベーターもできた。

天野の孫である阪根博・天野博物館理事によると、「入館無料を続けるのは大変。何とか工夫してしのぐしかない」と言う。無料を貫く陰には「友の会」の存在がある。

ブラジルW杯準備、心配ご無用

ある新聞のブラジル発の記事によると、サッカー・ワールドカップ（W杯）のスタジアム建設の遅れや航空運賃の上昇、それにまつわる政府部内の混乱に懸念が強まっている、と書いてあった。心配ご無用と言いたい。

W杯開催国は普通10会場（都市）程度を用意するが、ブラジルでは12都市を使う。そのうち半数の6都市のスタジアムはなお建設中だという。スタジアムを増やせば、当然空港や交通インフラの整備も必要だ。

FIFA（国際サッカー連盟）の事務局長が「急げ」と促したというから、建設・改修の遅れは深刻なのだろう。「ブラジル政府の公約には疑問符がつきまとう」と外国人は言う。そのとおりなのだが、そうしたまっとうな声にも馬耳東風なのがブラジルである。

ブラジルの「文化」のようなものかもしれない。約束の時間を守ろうとしないし、家の修理などを頼んでも期日までに済ませようとしない。ただ、会社の社員の場合だと、仕事をしないと自分の給料にかかわるので、きちんとやるべきことはやる。

使い分けがうまいという人もいるが、やはり何をするにも「のんびり、いいかげん」なのである。それでも、結局は何とかなるので、それでいいじゃないかと彼らは思っている。

W杯期間中の航空券とホテル価格の高騰もすごい。ブラジルだけの話ではないが、それにしてもよ

く上げたものだ。新聞報道によると、2014年6月12日の開幕日の国内航空券は10倍だという。ホテルも同様で、期間中の宿泊料金はブラジリアで通常料金の4～5倍、リオデジャネイロで2～3倍のところもあるらしい。当局は便乗値上げを防ぐ対策に乗り出したというが、それはほとんど無理というもの。

この「いいかげんな文化」に慣れないと、イライラが募って、心配するだけ損をする。家の修理工事だと「金をいっさい払わない」と言えばすぐにやるチャッカリした面もあるから、相手に合わせていいかげんに対応するしたたかさも必要だ。

この手の話を聞くとリオデジャネイロのカーニバル（謝肉祭）を思い出す。例年2月末から3月にかけて開かれる世界最大のお祭りである。リオの街のホテル料金は期間中何倍にも跳ね上がる。毎年このことなので、国民はそれをしぶしぶ受け入れている。

2013年6月にサッカーの大陸別選手権コンフェデレーションズ杯があり、ブラジルの優勝で幕を閉じた。その際、ブラジルでは考えられない理由の反政府デモが起こり、世界を驚かせた。「W杯より教育や福祉にカネを使え」という要求だったからだ。

確かに、12会場もスタジアムを建設・改修するお金があるなら、それを減らして国民のために使え、というのは説得力がある。これまでこうした要求が国民から出され

ることはなかった。民度が上がったと考えるべきだろう。ジルマ・ルセフ大統領の支持率は30%台に低下した。

しかし、駐日ブラジル総領事館のファラニ総領事はW杯をちっとも心配していない。デモ騒ぎはW杯に「反対」ではなく、65%がW杯開催に「賛成」と答えている（ブラジルの調査）。総領事は「ブラジルの何かを変えたいという国民の気持ちの表れではないか」という。なるほどW杯を「変化をもたらすイベント」ととらえると別の景色がみえてくる。

彼らブラジル人は大事業達成への妙な自信をもっている。その昔「50年の進歩を5年で」という掛け声のもとに1955年に大統領に当選、60年にブラジリアへの遷都を実現したクビチェクという元大統領もいる。あらゆる国内パワーを集中させ、大事業をやりとげる瞬発力は他国にはマネができない。

世界一の埋蔵量を誇るアマゾンのカラジャス鉄鉱山から大西洋の積み出し港までの約900キロの鉄道を難工事の末、10年ほどで完成させたこともある。いざとなると「いいかげん」な国民が火事場のナントカで、一気に底力をみせる。

FIFAはW杯に参加する選手の薬物使用検査について、ブラジルの検査機関は使わず、スイスに検査を任せることを決めたという。まだ信用しないのか、とあきれながらブラジル人は裏で笑っている。（日本ブラジル中央協会 常務理事 和田 昌親）